

交 番

フォト劇場 (33)

写真が生まれるものがたり

わが村の駐在さんは級友の美少女ミチコの父親な
りき
丹波真人

わが村の交番には、「駐在さん」として警官が
詰っていた。小学校時代の級友の父親だった。
何年か家族ぐるみで勤めていたが、やがて次
の勤務地へ越していった。どこか都会の雰
気のある美少女だった。

ロケ弁はカレーか唐揚げエキストラわれらは撮影
をはるのを待つ
平野清一

夜勤あけで署にもどってからも書類作成や引
き継ぎなどあつて退庁するのは午後になるこ
ともあると聞く。サービス残業に耐えてひた
すら勉強し、昇級試験に合格するのを待つ
のが現実らしい。



写真・木畑紀子

交番の青年よろし星ひとつみつからずある老女に
やさし
早川照子

独り暮しの友人が帰宅していない。不在に気がついたのでいちばん遠い長男。三姉弟が集合し、生活圏を搜索。時間の経過とともに夜も十時に。やむなく家に近い交番に届けることに。なんと、その交番前で、友人と子供らが鉢合わせ。闇に灯る交番は力強い。

夜学より帰る通りの派出所の前だけ灯りがにじみ
てゐたり
吉里幸雄

夜学生だった昭和三十年頃、秋の文化祭の練習で遅くなり、時雨の中を自転車で帰る時、派出所の前だけが異様に赤く滲んでいた。辛くはなかったが、その赤い灯りの色がなぜか妙に切なかつた。*派出所は、一九九四年「交番」に改称。